

感性を伸ばす造形教材の開発 1

～オブジェとコラグラフの制作～

Production of Teaching Materials for the Development of Sensitivity 1

～ Execute Object and Colla-graph ～

陣内 敦

I 保育者養成と感性教育

1 はじめに

筆者は保育者養成の教育課程において造形教育に携わってきた。これまで感性教育の必要性について講じてきたものの、教室内の授業だけでは感性教育の具体的な成果を確認することは難しいことも自認している。例えば学生が拾い集めてきた自然物に彩色を加えていく課題においても、学生たちの感性が自然の中でどのように働いているのか、これについて筆者は自身の想定範囲内で学生を理解してきたと回顧する。言い換えるならば、これらの教材のねらいをそのまま成果として置き換えてきてしまったのではないかという疑問である。保育者養成における感性教育の成果を、どのようにして確認することができるか、これを本研究の問題として取り上げることとする。

2 保育者が感性を働かせることの重要性

筆者は、感性とは五感を通して響かせる心情であると理解している。五つの感覚による心情の響きは、年齢と共に過去の記憶を織り交ぜながら複雑化していく。この複雑化が調和を持ちえた場合は、想像性豊かな感性であると評され、調和を持ち得なかった場合や鈍くなってしまった場合、貧しい感性とされる。保育者にとって、子どもと共感しあうことは重要な態度であり使命である。自然から受ける新鮮な感覚を呼び覚まししながら、豊かな感

性を育む教育が求められるところである。

3 コラグラフにある造形要素

造形は、保育5領域の中で「表現」の領域にあり、保育者養成の教育課程においては「表現造形」の科目名として在る。しかし、ここで幼児が表現していく前の段階、すなわち感受していくプロセスの重要性を再確認しなければならない。幼児の中で、外界の様々な要素が五感を通じて感受され認知されていく。この受け入れられた要素と感受性そのものが材料となり、表現につながってくる。すなわち、感覚体験の重要性の問題が持ち上がってくるのである。

さて、本研究で用いるオブジェとコラグラフについて極めて簡単な説明をおこなわなければならない。オブジェは、「物」をできるだけそのままの形で用い表現していく造形方法である。コラグラフという言葉はコラージュ（貼る）とグラフ（版画）の合成語であり、これを複合させた描画方法である。この二つの造形要素には、制作の第一段階に素材を収集してくるというプロセスが含まれ、この素朴かつ直接的な手法によって表現におこなわれていくという特徴がある。

4 研究の目的と方法

本研究では、保育者養成における感性教育の成果を、感覚体験や自然物を用いた制作によって学生たちの感性がどのように働くかを確認することを目的とする。

筆者の担当する専攻科保育専攻の2年次学生が履修する「保育内容(表現造形)研究Ⅰ」と「芸術論」の授業内で、感覚体験、オブジェとコラグラフの制作、作品展示をおこない、その成果確認を行った。

尚、各授業の到達目標は以下の通りである。

「保育内容(表現造形)研究Ⅰ」の到達目標
①幼児の造形活動についての重要性を理解する
②幼児の造形活動を計画する方法を習得する
③幼児の造形活動を支える事前準備と環境設定について理解する
④幼児の造形活動に対する保育者の支援内容を習得する
⑤保育の様々な活動を支える造形の役割を体験する
「芸術論」の到達目標
①芸術の領域と意義を考え、芸術と人間関係を理解する
②世界の美術史を学び、美術に関する見識を身につける
③芸術鑑賞によって社会人としての感性を磨く
④子どもの造形について考察し、保育観を深める
⑤自主企画展の運営によって、プレゼンテーション能力を高める

これらの到達目標ならびに授業内容の一部を連動させながら、本研究を実施した。

Ⅱ 感性を働かせる体験学習

1 感覚体験

本授業では、少人数クラスの利点を活かし、学外の自然体験を多く取り入れた。秋の野山の散策と海辺における造形遊び等である。ここで、学生たちは余裕のある時間配分の中で、まず自然に親しむ。幼児期の新鮮な感覚を取り戻しているかのように、枯葉を拾い、土を穿り、樹木の幹を触り、梢の揺れる音を聴き、海の水面の光を見つめ、波を素足で蹴り、砂を集め、貝殻を並べる。学生の表情からその感覚を楽しんでいることが分かる。考えることを強要されない時間によって、学生たちの心情はニュートラルな状態となり、自然を広く感受することができてくる。



■自然遊具で遊び始める学生の様子

この後、砂浜で筆者は、学生たちに「自然から感じたことをできるだけ素直に自然の中で表現してみましょう」という課題を出した。特に時間の制限は設けず、「日暮れ前に帰りたいので、出来上がったなら教えてください」と付け加え、やや遠くから見守った。学生たちは、一人の時間を楽しみ始め、居心地のよい場所に表現の場を求めていった。この表現方法はインスタレーション(即興芸術)ということになる。制作をおこなう学生の様子は、一人遊びをおこなう幼児と同じく五感を集中させながら、社会生活の中における言語とは異なる言語によって自然と交信していくかのようなであった。



■砂浜で制作を行う学生の様子



■制作例 石や漂流物を並べ鬼が島のようなものを表現した

次に、手の触覚を最も多用する陶芸の体験をおこなった。手びねり、板づくり、ろくろ成形によって陶器を制作した。粘土の触感は、古代から親しんだものであり、人間はここに安心感を覚え、癒し効果があることも知られている。



■ろくろ成形をおこなっている様子

2 オブジェ制作

前述した感覚体験活動の中で、自然物や漂流物の収集をおこなった。これを教室に持ち帰り、接着、着色しながら作品化する。前のインスタレーションにおける「並べる・重ねる」から加工的な要素が加わった造形活動になっており、室内制作の心理も加わって、自身が社会的な存在であることからのメッセージが込められた作品となっている。

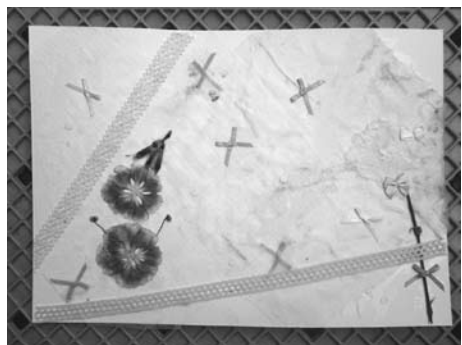


■学生のオブジェ作品

3 コラグラフ制作

(1) 原版制作

厚紙(イラストレーションボード)に、葉っぱや花片、タコ糸、リボン、布、羽等の厚みの少ない素材を、木工用ボンドで接着し、一晚重しをする。





■コラージュ技法で作った原版

(2) 原版加工

コラージュ技法で作られた原版に、インク付けの際に分かりやすいよう白色スプレーをかける。また版を強化するために、水性ニスで2～3回塗布し、コーティングする。



■ニスでコーティングした原版

(3) インク着け

一版一色刷りとなるため、インク色をその作品のイメージと重なるよう慎重に選定し調合する。インクは、エッチング(銅版)用インクをベースとするが、このままでは粘度が高すぎるため油彩画用のリンシードオイルを混ぜながら、粘度を下げる。このインクを最初原版に均一に塗り込む。凹部にインクがいきわたるよう布のタンポでしっかり塗り込む。次に、別のタンポを用い、凸部のインクを拭き取りながら、色の濃淡を出していく。



(4) 刷り

プレス機に版をのせ、水分を含ませた版画紙(アルデバラン)を被せる。さらに高圧力に耐えられるようにフェルト布を二重に被せる。



■インクの乗った原版に版画紙を被せる

凹部のインクを転写させるため、高い圧力をかける。プレス機のハンドルを一定の速度になるようにゆっくり回しながら刷り上げる。紙を慎重に持ち上げ、乾燥棚で一週間程度乾かす。



■プレス機を回し、刷り上げていく

(5) コラグラフの完成
学生のコラグラフ作品



Ⅲ 感性が伝えるメッセージ

1 作品を通して学生が伝えようとしたものと
培われた感性

本授業で展開してきた感覚体験、コラージュ
の制作、コラグラフの制作によって感性の働
きの様子を見るために、学生たち自身にこれ
らの作品を発表する展覧会を企画・運営させ
ることにした。展覧会名は、「ナチュラルアート」
とされ、平成25年1月17日(木)～1月
23日(木)の期間、長崎短期大学本館のガラ
ス張り通路に展示した。



■展示風景

また、筆者のコラグラフ作品とアッサンブ
ラージュ作品(コラージュとオブジェの中間的
な表現形態)を賛助出品し、自然物を用いた表
現の広がりを示した。



■左は筆者のアッサンブラージュ 右はコラグラフ
また、本展覧会のポスターには、学生たちが自然について思索したことを踏まえながら、それぞれのテーマで以下のように作文している。

○自然と人間の関係

人間は自然から生かされている。人間が生きていく上で、自然は切っても切れない関係である。しかし、自然は人間に対して時に残酷な場合もある。2011年の東日本大震災では自然の恐ろしさを痛感させられた。それでも自然との縁は切れることがない。恐ろしさを感じる反面、自然に安らぎや楽しさを感じることもある。自然が与えてくれる安らぎや楽しさに対して、人間は自然に対して何かしてあげられているだろうか。食をいただいている自然に感謝できているだろうか。今では当たり前のように思っている人間が多いのではないだろうか。水に関しても、雨が降らなければ水はなくなってしまう。一つ一つに感謝しなくてはならないと思う。

今では、森林伐採が多くのところではされている。木が無くなり、高層ビルが次々と増えてきている。自然がどんどん無くなってきていて、自然物もあまり目にしないようになってきたと感じる。

今、自然への感謝の気持ちが欠けているのではないかと思うことがある。自然なしでは生きていけない人間なのに、感謝を忘れずにいる人はどれだけいるだろう。自然を大切にすることで、ありがたさを感じることができるのではないだろうか。しかし、人間も自然を活かそうとしている場面もある。今までは捨てていたごみも、リサイクルすればまた新しいものが作られ

る。そういった場面は非常に喜ばしいことである。自然が人間にくれたものはたくさんあるけれど、人間も自然がくれたもので何かできることがあるのではないかと思う。

どんなに時が経っても、人間と自然の関係が崩れることはない。これからずっと切れることはなく、互いに必要不可欠な存在でい続けたいと思う。

○自然を使う意味

普段、私たちは自然を意識して生活を送っているだろうか。雨や風の天候等、日常生活に係わることを意識してはいても、道端に咲く小さな花に目を止める人はどれほどいるのだろう。今回私たちは身近な環境にある自然物、例えば落ち葉や貝殻や流木を作品作りに取り入れて、自然と直に触れ合いながら造形活動を行ってきた。自然物と触れ合うことで、落ち葉一枚でも他と色合いや形が違うこと、貝殻の表面には年輪のように成長してきたしがあること、砂浜に打ち上げられた流木が手のひらに馴染むような触り心地がすること、様々なものを五感で感じ取ることができた。また、自然物を造形の材料として取り入れ、切ったり組み合わせたり加工していく中で自然物の生態や仕組みに触れるきっかけになった。

版画に植物を使ったりオブジェに貝殻を用いたり身近な環境にある自然物を作品に取り入れることで、作者の気持ちが作品を見る人の胸のうちに訴え掛けるのではないか。自然素材のありのままの形を活かして作品作りに用いることによって、かけがえのない自然の美しさや大切さを見る人に投げかけ伝えることができるのではないか。私たちの作品を見て、改めて身近な環境にある自然のことを考えて目を向けてもらえたらのならば嬉しい。私たちの作品が、あなたが自然に対して考えるきっかけに少しでもなれたらと考えている。

○自然が与えるイメージ

私たちは日々自然の中で生き、何気なく生活しているが、自然が与えるイメージとはなんだろう。“自然”という言葉イメージすると山や川、草、木などを思い浮かべる。草や木が揺れているのを見ると涼しい、清々しい気持ちが表われ、空は青くてきれいだと感じる。天気、生物、

木の色を通して四季を教えてくれ、風、雨などで体に日々のことを教えてくれる。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感を自然はすべて私たちに与えてくれているのだ。自然は私たちに自然の素晴らしさを表わしてくれているのだ。

雪が溶けたら春だと思うのも、日頃自然が気付かないところで私たちに教えてくれているからだ。楽しい気持ち、悲しい気持ちなどすべての気持ちを受け止めてくれるのが自然である。自然はお母さんのような存在だ。

今回私たちは、学内や近くに出向き、自然のものを探してきた。毎日教室でもって勉強している私たちだが、ちょっと外を眺めてみると、光が差し込んできて様々な感情があふれてくる。悲しいとき、海に行くとき「大丈夫」「がんばれ」と言われているように感じ、いつも何気なく見ている葉っぱも人の顔に見えたりする。そんな自然が与えてくれるイメージを3人は想像して2つの作品を作ってみた。Sは自然を通して、「人間、全員が仲間、みんなで1つ」という世界平和と、季節の風情を通して自然の大切さを伝えたいと思って作った。Tは自然を通して「やればできる!」という挑戦を、イメージして作った。Mは今の自分の心情を表現した。自分たちが表現したことによって、自然が「みんな1つだよ!大丈夫。君なら出来る!頑張ってね!」という気持ちを、見ている人に与えているのではないかと思う。自然は日々私たちに勇気を与えてくれているのだ。

また、学生たちは展覧会を振り返って学んだ成果を下のように記している。

○ナチュラルアート展を振り返って

自然物を使った造形活動を行い、それらを展示し、展覧会を運営する。今回運営した展覧会は私たちにとって初めての試みであり、何もかもが手探りで始まった展覧会だった。展示したオブジェや版画を制作する際の材料となる、貝殻や落ち葉、砂浜に打ち上げられたボールや流木などは直接自分たちの手で拾い、自分の感性のままに制作した。

今回、オブジェや版画に身近な環境にある自然物を取り入れた際に、貝殻や流木や落ち葉などの素材から色々なことを感じ取ることができた。貝殻や流木が打ち上げる海水により磨耗され、柔らかく手のひらに馴染むような触心地

がすることや、落ち葉にも様々な色合いや形があることなどを、五感を通じて感じ取ることができた。自然物そのもののよさを生かして作品の制作に取り組んできたが、作品を作る者の心にはもちろん、作品を見る者の心にも感じるものがあつたのではないだろうか。

展示するにあたり、展覧会のタイトルを「ナチュラルアート」とした。ナチュラルアートは自然物を使ったことにも由来するが、それだけでなく、自然物を取り入れた作品を見る者の心に「自然に対する考え」や「自然に対する感謝」を持ってもらうきっかけになると嬉しい、そのような意味合いも込められている。また、自然と人とは切っても切れない強い関係であり、それはたとえどんなに月日が経とうと変わらないものである。そのことに気づいてはいるものの、人は普段意識して考えようとはしていない。自然に触れることで癒され、ときには勇気をもらいながら私たちは生きているのである。自然物を取り入れた造形活動によって得たこの経験は、私たちにとってもかけがえのないものであつた。

本ナチュラルアート展は、観覧後のアンケートをおこなった。「作品を見て、どう感じられましたか?感想をお願いします」という問いに対して、以下の回答が寄せられた。

●「進め!!」Mさんの作品は、大人の階段をのぼっている感じ。一步一步迷いなく確実に歩んでいる印象。

「絆」Sさんの作品は野球ボールから地球をイメージ。「松ぼっくりのサンタクロース」Tさんの作品は、サンタはいないが煙突からそびえる緑の木をつたって空からサンタが降りてくるイメージ。

●「進め!」の作品がとても好きです。かわいいなと思いました。サンタさんがいたらもっと良かったです。色使いがかわいらしくていいなと思いました。絆のテーマが最近らしいと思います。

●「温かくて優しい」です。

●感じたものを表現する力が素晴らしい。ないものを形にする。形に出来ることが素晴らしいと思います。

●自然を持つ癒しを絵画、芸術の世界に取り入れているところに落ち着きました。

●絆…日常生活、毎日の暮らしで自然に絆が結ば

れているのではないかと感じさせられました。
松ぼっくりのサンタさん…色鮮やかで明るい世界を感じました。小石をプレゼントの箱に見立てているのがGOODでした。
進め！…冬眠から目覚めたねずみが元々よく外の世界に飛び出しているイメージです。
全体的に落ち着く印象を持ちました。
●いつも私たちの周辺にある素材を使い創り上げた作品。考え方を変えてみれば素晴らしいものになりますね。
青い冬…冬の寒さの中でも花や動きが躍動的。
夜明け…広い緩い明を感じます。
輝き…落ち着いた何かの動き、何が始まるのかな？
●身近にあるものでこんなに素敵なもの(作品)が出来るのですね。それぞれの感性がとても素晴らしいと思いました。

次に「あなたにとって自然とは何ですか？また、私たち人間に出来ることを考えお答えください」という問いに対して、以下の回答が寄せられた。

●人間の力では動かすことのできない「美」
●自然とは私のすべてです。
●普段は意識していないが、なにかのきっかけでとても力をもらったり、温かい気持ちにさせてくれる存在。(元気の源)
その一方で時には人間の力を超越した影響を与える存在。
私たちが出来る事は「共存」でしょうか？！
●自然とは「感じるもの」です。感性を大事にしてしっかり自然と向き合うことがまず出来ることではないでしょうか。そこからいろんな行動に広がっていくのではと思います。
●“なくてはならないもの”であることは当然なのですが、私にとっては“癒し”です。自然を持つ美しさと穏やかさが心のゆとりをもたらしてくれます。このような自然を守るために、火力・原子力エネルギーの依存からの脱却や、もっと身近なところで言えば、紙を無駄にしないことなどに取り組んでいくべきだと考えます。
●身近にあるもの。私たちに恵みをもたらしてくれるし、時として驚威にもなる存在。だからとって

て恐れるものではなく、いつも隣にあり落ち着くもの。これらの作品をみて特にそう思いました。
●自然は人間にとってとても大切な存在ではなくてはならない存在。そっと触れることで自分の落ち着きを取り戻せる存在。みんなで大切にし守り傷つけないよう自然の中で自分の生活を考えたい。
●ホッとする言葉、安心する場所、「無」で自分を受け止めてくれる。自分を見つめなおすことのできる空間。

学生たちは、上記アンケートを集計した後、次のような考察を残している。

アンケートに答えてくれた人は保育関係の人が主であった。それぞれの作品のイメージ、ナチュラルアート展全体を見て感じたことや、作品の素晴らしさが評価される内容だった。また、自然とは何か？という難しい質問に対し、「美」や「すべて」、などの目には見えないが大切な存在であることが分かった。私たちが出来る事は、何か特別に作ったりなどの行動をするのではなく、「共存」や、「自然と向き合うこと」が大事ではないか。という声が挙がった。

アンケート結果を集計して、私たち3人が作品を通して伝えたかったことが伝わっていたように感じる。「温かくて優しい」「表現する力、ないものを形にする、形に出来るのが素晴らしい」という感想をもらうことが出来、大変良かったと思う。自然とは何か？私たちに出来ることは何か？それは一言で答えを出すことはできない。しかし、すべての人が自然に対し「かけがえない存在」ということは変わりない。そして、その自然のために何かを起こしたりすることはなかなか難しい現実であるが、一人ひとりが自然の「大切さ」を忘れず、自然がなくならないよう考えることが一番大事だと思った。

2 おわりに

本研究において、自然物に触れる授業を通して感性が働いていく様子を確認することができた。学生たちが企画した展覧会の中で、自然物を用いた作品の展示と共に、学生たちは自然について考え、語りかけることができた。一連の授業の目標である感性教育は、学習の成果を得たと考えられる。学生たちは、自然の美しさとありがたさを確認した。これは感覚が知性を伴いながらたどり着いた価値観である。自然の美しさを子どもたちと共感しあい、自然のありがたさを伝える、これは、大切な幼児期を預かった保育者の大切な使命である考える。